

キリスト教禁止と鎖国

執筆・講師
山本博文

学習のねらい

江戸幕府は、キリスト教の信仰を禁止し、貿易統制を進めていく。そして3代将軍の徳川家光は、キリスト教の禁止をより強化し、日本人の海外渡航を禁じるなど、のちに「鎖国」と称される体制を作った。「鎖国」体制を作らざるを得なかった理由や、「鎖国」がどのような内容を持つものかを理解する。

禁教と貿易統制の強化

徳川家康は、それまでの秀吉が行ってきた強圧的な外交政策をあらため、明や朝鮮との講和を進め、東南アジア各国に渡航する船に朱印状を交付し、朱印船貿易を振興した。朱印船貿易は、銀・銅などの鉱産物や工芸品などを輸出し、中国の生糸や絹織物、東南アジア産の象牙・鮫皮や砂糖などを輸入した。日本には、これまでのポルトガルやスペインの船だけではなく、オランダやイギリスの船も来航した。

家康は、貿易の利益のため、キリスト教宣教師の来日と布教を黙認していたが、そのためキリスト教は日本各地に広まった。そこで家康は、1613年、全国に禁教令を出して、信者に改宗を迫った。1616年、2代将軍の秀忠は、ヨーロッパからの船の寄港地を長崎と平戸に限定し、朱印状の発行も制限するようになり、1631年には奉書船貿易を始めた。家光は、1633年、奉書船以外の日本船の海外渡航を禁じ、1635年にはすべての日本船の海外渡航を禁じ、海外在住の日本人の帰国も禁止した。

島原・天草一揆と鎖国

3代将軍の家光の厳しい禁教もあって、1637年、九州の島原・天草地方で、キリシタン民衆の一揆が起こる（島原・天草一揆）。この地方では、キリシタン大名が領地を治めていたので、もと武士でキリシタンだった土豪が多く、民衆にもキリスト教の教えが浸透していた。キリシタン土豪たちは、益田（天草）四郎時貞という少年を奉じてキリシタンによる反乱を企てたのである。家光は、九州大名を動員して島原半島南部の原城跡に籠もったキリシタン一揆を鎮圧するとともに、長崎の出島に居留し、貿易だけでなく布教も行っていったポルトガル人を、1639年に日本から追放し、1641年には平戸にあったオランダ商館を出島に移した。スペイ

ン人はすでに来航を禁じられており、イギリス人は貿易不振のため日本から撤退していたので、日本に来航するヨーロッパ船は、オランダだけになった。

鎖国下の対外関係

日本に来航したオランダ船は、長崎に入港し、出島に居留して貿易を行った。中国船も長崎に来航し、貿易を行った。1688年、中国商人は、唐人屋敷と言われる長崎の一区画に居住を制限された。幕府が直轄していた貿易都市は長崎だけだったが、朝鮮とは対馬藩を介して国交が結ばれ、将軍の代替わりなどに朝鮮通信使が来日した。対馬藩は、外交業務を行うとともに、朝鮮との貿易を独占した。琉球は、薩摩藩に攻められ支配下に置かれていたが、対外的には独立国の形をとったので、中国に朝貢し貿易を行っていた。蝦夷地の南端を支配する松前藩は、アイヌ民族との交易を独占していた。このように、日本は、長崎、対馬藩、薩摩藩、松前藩の「四つの口」から世界に開かれており、長崎に来航するオランダ船と中国船にオランダ風説書^{ふうせつがき}や唐船風説書^{とうせん}を提出させることで海外の情報を得ていた。

貿易によって日本から金銀が流出したため、幕府はしばしば貿易制限を行った。最も徹底したのは、1715年に出された海舶互市新例^{かいぱくごししんれい}で、年間貿易量をオランダ船は船2隻・銀3000貫、中国船は30隻・銀6000貫に制限にし、銀に代えて銅で支払うことにした。また、のちに蝦夷地の開発とアイヌ民族との交易を振興し、倭物^{たからもの}と呼ばれた海産物を輸出品とした。輸入品であった生糸や絹織物、木綿などは、国産化を進めていった。生糸は、明治時代には輸出品の中心となり日本の近代化を支えた。